

春はそこまで

大森 海太

いま振り返ってみると去年は秋が短かった。いつまでも暑い日が続いたと思ったら、急に寒くなって冬が来た。十一月の後半から十二月にかけて日が短くなり、午後五時前から陽が落ちる。迫り来る夕闇、薄暗くなった街かど、あたりには滅びの気配が漂っている。

いやだいやだ、冬は嫌いだ。手はカサカサになるし、足にはアカギレができるし、年寄りには低体温症にも気をつけなければならないとか。ちよっと前までの猛暑日が懐かしくなってくる。

そして年末、冬至を迎えクリスマスから除夜の鐘で年が明ける。

すると気のせいかな方が少しづつ明るくなってくる。ついこのまえまで枯れていた枝先の小さなつぼみたちは目を覚まし始めたのだろうか。まだまだ真冬の最中だが、待ちかねた春はそこまで来ているらしい。

そうこうするうちに、大寒を過ぎて早くも立春、夕方の五時をまわってもまだ明るい。三寒四温でとても寒い日もあるが、散歩の途中で堀越しに見える白梅が咲きだした。近所の寺の紅梅も満開だ。ここにピンクや黄色の名も知らぬ花が咲き始める。わざわざ観光地に行かなくても近くの街や公園など、春はそこら中に来ている。

そうだ、あの冬の死の世界からふたたび春がよみがえってきたのだ。なんと嬉しいことだろうか。

西洋の復活祭はキリストが磔刑から三日後によみがえったことを寿ぐ祭りだが、一説には北国のゲルマン人たちが春の到来を祝うことに由来するともいわれている。そのほかにも世界中の各地では、春を迎えてそれぞれに特徴のある祭りや催しが行われる。かの中国では、延べ数十億人が春節にあわせて一斉に移動するとか、信じられない数字である。

考えてみると若いうちは季節の移り変わりについて、そこまでも思いを廻らしてみることがなかった。やはりトシをとったせいなのだろうか。

ウーム、わが一生であと何回春を迎えられるのだろうか。そんなことを考えていると、なおのこと愛おしく感じられる昨日今日である。